離れても、
関わり続ける仙台へ。

仙台・東北への愛着を背景とした、

地域との関わりに関する若者の意識について

A

せんだいユースカウンシル Aグループ

仙台若者会議「せんだいユースカウンシル」 Aグループ提言

ONE PIPELINE

学生から社会人へ、仙台との関わりをつなぐ

学生 STUDENT

在学中に、役割と居場所を持つ

社会人 YOUNG PRO

離れても、関わり続ける

関係人口 FOR SENDAI

次の若者を、仙台へ呼び込む

CONTENTS

01	テーマ理解		P.3
02	現状と課題・提言の全体像		P.4
03	市の施策評価		P.6
04	学生向け提言 — 仙台杜のたねプロジェクト	学生向け	P.8
05	社会人向け提言 — いぎなりパスポート × デジタル市民（仮）	社会人向け	P.15
06	まとめ		P.19
A	APPENDIX — 参考資料		P.24

資料の見方　イエロー＝学生向け　グリーン＝社会人向け　ダークグリーン＝共通

目指すのは、転出後も関わり続ける「関係人口」の拡大

進学・就職で仙台と関わった若者が、離れたあとも多様な形で関わり続ける

「関係人口」として、つながりを維持・発展させる

01
地域のファン化

現地の人との交流を通じて、
仙台を「好きな街」から
「自分の街」に

02
居場所づくり

役割とコミュニティがあるから、
帰ってくる理由になる

03
帰属意識の醸成

「仙台の若者である」という
ステータスが、転出後も続く

対象　**学生**　県内大学生（在学中～卒業後）　**社会人**　県外在住の若手社会人（来訪経験者・転出OBOG）

東北から若者が集まり、就職期に東京圏へ流出している

20歳代の転入

約6割

東北各地 → 仙台

が宮城県内・東北5県から

宮城県内 26.0%＋東北5県 35.3%（転入 15,993人）

東北各地の若い世代が、進学・就職で仙台に集まる

20歳代の転出

約4割

仙台 → 東京圏

が東京圏へ

東京圏 39.8%（転出 15,528人）

集めた若者を、東京圏に送り出してしまっている

仙台市では 20〜24歳 → 25〜29歳 になるときに大規模な転出超過

＝ 就職期に関わりが途切れている

出典：仙台市まちづくり政策局「東北大学と協調した地域創生」（2025年1月）／住民基本台帳に基づく日本人住民人口（2023年）・国勢調査

学生と社会人、2つの施策を「1本のパイプライン」でつなぐ

学生向け施策

- 若者が運営主体・仙台市が主管の
  情報発信＆協働プラットフォーム
- 気軽に参加できる活動と、
  責任ある役割・「◯期生」の居場所を提供
- 卒業・転出後はOBOGに
  「アンバサダー」の地位を付与

卒業後は
OBOG
アンバサダーへ

社会人向け施策

- 市の認定と特典で
  「再訪の理由」をつくる
- 県外にいても繋がれるコミュニティで
  帰属意識を育てる
- 周遊スタンプ・友人割引で、
  何度も来る動機をつくる

土台　**国の「ふるさと住民登録制度」（総務省）と紐付け、登録・特典の共通基盤として活用**

03｜市の施策評価 ― 学生向け

取組は存在するが、「届いていない」「役割まで至らない」

既存施策が行っていること

- 仙白縁・WAMIT's：学生と地域の接点づくり
- ユーチャレ（若者版・市民協働事業提案制度）：若者からの提案を市が助成
- ジュニアリーダー等：中高生世代の育成

⇒ 意欲ある若者に機会を提供できている

何が足りないか

1. 広報が弱く、若者向けの取組が若者に知られていない
2. 情報が施策ごとにバラバラで、一元化されていない
3. 参加後の「まちの中での役割」までは提供できていない
4. 各課には若者のアイデアへの需要があるのに、接点がない

施策への示唆　情報の一元化 × 若者主体の発信 × 責任ある役割の提供

情報は届き始めたが、「実感」と「継続」につながらない

既存施策が行っていること

- CROSS SENDAI：仙台のシゴトや暮らしを届ける動画メディア（情報◎）
- チームまちかつ 等：まちづくり活動の支援

⇒ 「知る」入口はつくれている

何が足りないか

1. 情報は届くが「実感」に変わらない
   （CROSS SENDAI：情報◎・実感△）
2. 施策同士がバラバラで、
   ターゲットに届きづらい
3. 「知る → 来る → また来る」を
   つなぐ動線・特典がない

施策への示唆　施策を束ねる「認定と特典」の仕組みで、再訪の理由をつくる

CHAPTER 04 — FOR STUDENTS

学生向け提言

04

県内大学生に「役割」と「居場所」を

— 仙台杜のたねプロジェクト

「仙台に来た」若者は、新しい「居場所」の作り方が分からないという悩みを抱えている

ターゲット

進学・就職を機に仙台市に転入してきた学生・若手社会人

コア層＝責任ある役割を担いたい層 ／ ライト層＝ガクチカやボランティアを気軽に試したい層

あらためて ― 仙台に来た若者が抱える4つの課題

出所：Aグループ議論（第1〜3回）より

1 **関わりを始めるきっかけがない**

地域における活動を始めるきっかけがなく、
参加方法も分かりにくい

2 **関わるための施策が届いていない**

市の既存の若者向け施策が、
当の若者に認知されていない

3 **活動に参加しても自分だけの役割がない**

参加しても当事者意識が薄い。
「自分だけの役割」がない

4 **就職を機に関わりが途切れてしまう**

就職を機に仙台を離れ、
そのまま関係が切れてしまう

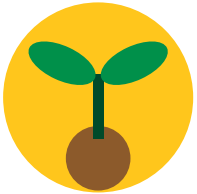
現状の施策だけでは、特に ②届いていない・③役割がない にアプローチしきれていない

だから、仙台に来た若者は新しい「居場所」の作り方が分からない ― 施策の目的は、その「居場所」をつくること

『仙台杜のたねプロジェクト』ー通称「もりたね」

施策概要

- 若者が運営主体・仙台市が主管の情報発信＆協働プラットフォーム
- 行政に限らず、学生主体・民間・地域の取組も幅広くキュレーション
- 誰もが気軽に参加できる活動の入口を用意
- 各課からの依頼に応える「役割」と「◯期生」の居場所を提供
- 卒業・転出後はOBOGに「アンバサダー」の地位を付与



※ロゴはイメージ

PROJECT

仙台杜のたね プロジェクト

運営：チームたねっこ

『タネ』に込めた3つの意味

① **知るタネ**

＝ きっかけ

市政や地域の魅力を知る

② **悩みのタネ**

＝ 解決するもの

地域の方が抱えるお悩み

③ **繋がりのタネ**

＝ 広がっていくもの

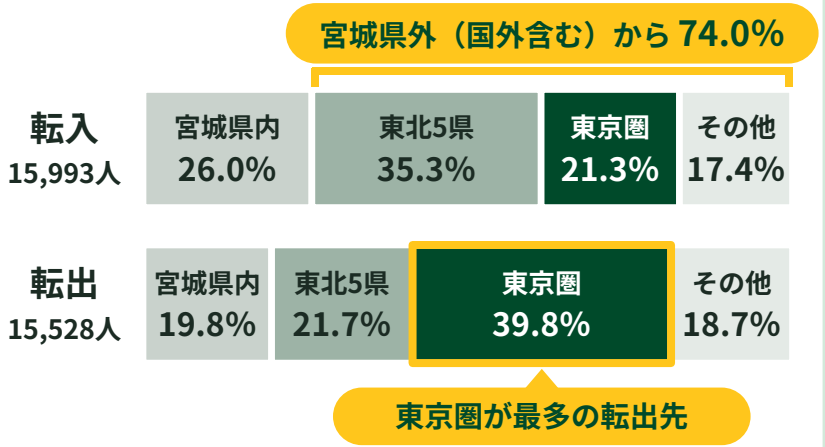
人と人が繋がって育っていく

04｜学生向け ― 最大のポイント

「呼び戻す」施策ではなく、「来た人をつなぎ止める」施策

観点	既存の関係人口施策	仙台杜のたねプロジェクト
ターゲット	県内出身の県外転出者	県外出身の県内転入者（若者に特化）
発信の主体	自治体	若者自身（親近感・情報への抵抗感をなくす）
発信の範囲	自治体主催の情報が中心	地域で活動する若者・民間の取組まで広く網羅
つなぎ方	転出した出身者を呼び戻す	役割付与と魅力訴求で、転入者をつなぎ止める

20歳代の転入元・転出先（仙台市・2023年）



20代の転入者の約4分の3は、宮城県外から
＝「出身者を呼び戻す」施策だけでは届かない層

※ 類似のユーチャレ（市民活動団体→市への提案・助成）とは逆方向：市の各課→若者への依頼を起点にできる

出典：仙台市まちづくり政策局「東北大学と協調した地域創生」（2025年1月）p.2の図をもとに作成／住民基本台帳に基づく日本人住民人口（2023年）

若者が発信し、市が支える ― 気軽な入口と責任ある役割を一体でつくる

P.9 の課題との対応

認知の壁 取組は多いのに情報が一元化されておらず、知られていない	**若者が運営主体となり、若者目線で情報を一元化・発信する**	② 届く
欲求の壁 存在を知っても中身が分からず、「やりたい」につながらない	**仙台市が主管となって信頼性を担保し、安心して飛び込める入口にする**	① きっかけ
行動の壁 参加方法が不明確で、組織所属のハードルが高い	**誰もが気軽にチャレンジできる活動と、責任ある役割を付与し 仲間との居場所づくりにつながる活動の双方を行う**	① ③
行政の壁 市側に協働ニーズはあるが、若者との接点を創出できていない	**各課の依頼・困りごとと若者をつなぐコーディネート機能を担う**	③ 役割

参考：にいがた鮭プロジェクト（学生運営の情報集約）、広報いせさき ほか他都市事例

「たねっこ」を中心とした発信が、仙台市の学生全体の行動につながる

チームたねっこ（仙台杜のたねプロジェクト 運営メンバー）



コア層 社会的役割を一定の責任のもとで担いたい層

発信

発信するコンテンツ

- 若者のとりくみ
- 仙台市のとりくみ
- プロジェクトの活動



ライト層 なんとなくボランティアやガクチカになる活動をしてみたい層

発信を見て、ボランティア・イベントに参加
⇒ 一部はコア層（次期メンバー）へ

参考：にいがた鮭プロジェクト（主催 新潟日報社・共催 新潟県／学生チームが運営） https://sakepro.jp/

3つのフェーズで、若者が自走する「仙台関係人口のハブ」へ

今後の展望 ― 活動ロードマップ

P1 広報・PR
行政・民間の依頼を受け、
若者目線で情報を翻訳し発信

P2 マッチング
発信を見た若者と、
助けを求める行政・地域をつなぐ

P3 自主企画
仙台に足りないものを自ら考え、
イベントやコミュニティを創出

見込まれる期待

若者（チームたねっこ）にとって

- 企画から実行までやり切る、実践経験と成長の機会
- 卒業後も続く「◯期生」の仲間という居場所
- 卒業後も「アンバサダー」として仙台に関わり続けられる立

仙台市にとって

- 若者目線の発信で、市の施策が若者に届きやすくなる
- 各課の依頼・困りごとに、若者の力とアイデアを活かせる
- 転出後も仙台と関わり続ける関係人口の増加につながる

中長期ビジョン
**プラットフォームそのものが若者の居場所として自走し、
転出後もOBOGが関わり続ける「仙台関係人口のハブ」へ**

CHAPTER 05 — FOR YOUNG PROFESSIONALS

社会人向け提言

05

県外在住の若手社会人に「再訪の理由」と「帰属意識」を

— いぎなりパスポート × デジタル市民（仮）

05｜社会人向け — 課題

「再訪の理由」「関わり代」「帰属意識」の3つの不在に絞る

ターゲット　仙台への来訪経験がある県外在住の若手社会人（観光・出張・帰省）＋ 仙台を離れたOBOG

課題 01

再訪の理由がない

2回目以降、来てもらう
理由がない。「仙台ならでは」の
発掘・広報も不足

課題 02

関わり代がない

市へ能動的に関わる手段がなく、
応援したくてもできない

課題 03

帰属意識がない

仙台と「つながっている」
感覚が持てず、住む・通う
候補にならない

「特典 × 認定 × コミュニティ」で、関わりを設計する

再訪の理由がない	特典・割引・周遊の仕掛け（パスポート）で、何度も来る動機をつくる	特典
関わり代がない	市が「アンバサダー」として認定し、仙台を広める役割を付与する	認定
帰属意識がない	県外にいても繋がれる「デジタル市民」コミュニティで、仙台の一員になれる	コミュニティ

参考：群馬パスポート（GUNMA PASSPORT／群馬県が発行するパスポート型パンフレット。市町村スタンプ・特典店つき）

「いぎなりパスポート」×「デジタル市民（仮）」の二本柱

アンバサダー制度

いぎなりパスポート

- 仙台市が公式に「アンバサダー」を認定
  （ボランティア等の参加者から）
- アンバサダー名刺と、
  市内施設・店舗で使える特典・割引
- 周遊するとスタンプ（焼印）が貯まり、
  宮城以外の東北にも展開可能
- 友人を連れて来ると使える割引で
  「連れてくるきっかけ」をつくる



※ イメージ

×

コミュニティ

デジタル市民（仮）

- 申請すれば誰でもなれる
  「もうひとつの“市民証”」（数量限定も検討）
- 一人ひとりに固有の番号を発行
  （NFTのようなデジタル証明）
- 市内施設・割引特典に加え、
  県外での「デジタル市民コミュニティ」
- 仙台のおもしろい人たちと繋がる機会を提供

※ デジタル市民（仮）の名称は「コミュニティ感」が伝わるものへ要検討

CHAPTER 06 — SUMMARY

まとめ

06

学生向け施策と社会人向け施策を、1本のパイプラインに

— 若者を「一度きり」で終わらせない仙台へ

若者と仙台の関わりは、いま「一度きり」で途切れている

STEP 1

接点が生まれる

進学・就職・観光で
仙台に来る

STEP 2

関わりが薄い

施策が届かず、
役割も居場所もない

→ 学生向け施策で解消

STEP 3

途切れる

卒業・転出・帰宅を機に
関係が消える

→ 社会人向け施策で解消

共通課題

「継続した関わり」が仕組みとして存在しない

学生施策の卒業生が、社会人施策の担い手になる

在学中（学生）	卒業・転出	転出後（社会人）	また仙台へ
仙台杜のたねプロジェクトで役割と居場所を持つ	OBOGとしてアンバサダーに認定	パスポート・デジタル市民で関わり続ける	また来る・応援する・発信する仙台関係人口のハブに

めぐる流れ

転出後も関わり続けるOBOGが仙台の魅力を発信し、
次の若者を仙台へ呼び込む

2つの施策は独立した提案ではなく、

若者を「一度きり」で終わらせない、1本の関係人口パイプライン

06｜まとめ

「仙台に来た」を、一生の関わりに変える

1 制度との接続

国の「ふるさと住民登録制度」（総務省）と紐付け、登録・特典の共通基盤に。
国の後押しを活かせる今が好機

国の制度

2 評価の観点

①関係人口の創出　②ライト層〜コア層の行動変容
③若者への裁量と心理的安全性 ― の3点で施策を評価

3つの観点

3 次のステップ

デジタル市民（仮）の名称決定／各取組内容の詳細化／
市の既存事業との棲み分け整理／学生×社会人施策の運用設計

次の一手

若者を「一度きり」で終わらせない仙台へ。　せんだいユースカウンシル Aグループからの提言です。

離れても、関わり続ける仙台へ。

ご清聴ありがとうございました

学生 → **社会人** → **関係人口**

在学中に、役割と居場所を持つ

離れても、関わり続ける

次の若者を、仙台へ呼び込む

せんだいユースカウンシル Aグループ

仙台若者会議「せんだいユースカウンシル」

APPENDIX

参考資料

会議で挙がったアイデア案（学生向け・社会人向け）

詳細資料・出典リンク

会議で挙がったアイデアの原案（学生向け）

フォーカスする課題

- 学生が地域を自分ごと化して
  コミットできる機会の創出
- 地域と繋がる
  学生活動コミュニティの創出
- ボランティア活動のための
  情報と現場の確保
- 地域の人の顔が見える関係性、
  繋がりの構築
- 新しい地域課題の発掘と
  担い手の確保

案1
行政協働課題解決プロジェクト

ターゲット

地域に継続的に入り、自ら課題解決や
価値創造のためのプロジェクトを
企画運営したい学生

目的

地域に入り、仲間や地域住民と活動を
組成することで、地域への愛着醸成と
居場所となるコミュニティ作りを目的とする

内容

地域、自治体と連携し、仙台の学生を
地域に呼び込みながら、地域との交流、
プロジェクト組成を行う

案2
地域連携ボランティアプロジェクト

ターゲット

地域に入りボランティア活動に
取り組みたい学生

目的

地域のニーズに沿うボランティアを
市が主体となって募集することにより、
学生が安心して参加できるプラット
フォームを作る。他大学や地域との
繋がりを促進する

内容

各地域におけるボランティアニーズを
整理し、活動したい大学生との
マッチングを行う

※ 第1〜3回会議の議論メモより。本編P.9-14の施策はこれらを統合・発展させたもの

会議で挙がったアイデアの原案（社会人向け）

フォーカスする課題

市への能動的関わり代がない ／ “仙台ならでは”を発掘・広報できていない ／ 回遊性・観光PR不足 ／ 連れてくる口実がない

2回目以降の来訪理由がない ／ 帰属意識がない ／ 住む場所【高】観光地【低】⇒ 試しに住む機会がない ／ 宮城以外の東北に人を呼べていない

案1
アンバサダー制度

- 名称案：みちのくパスポート？（参考：群馬パスポート、りょうまパスポート）
  → 本編では「いぎなりパスポート」に
- 仙台市が認定。
  ボランティア等に参加した人を認定
- アンバサダーに対する割引をつくる／名刺を渡す
- 周遊すると焼印（スタンプ）

案2
友人連れてくる割引

- アンバサダーが連れてきた友人は、飲食代や体験料金など観光費の一部に対し助成を受けられる
- アンバサダー制度の一部として組み込む案もあり

案3
デジタル市民

- 申請すればもらえる（数量限定も検討）
- 個別識別できるNo.（NFT的）を発行
- 施設や割引が効く／デジタル市民コミュニティ@県外
- 仙台のおもしろい人たちと繋がる機会
- ※ コミュニティ感が出る名称の方が良いという指摘あり

※ 第1〜3回会議の議論メモより。本編P.16-18の施策はこれらを統合・発展させたもの

詳細資料・出典リンク

詳細資料 関係人口施策案（詳細スプレッドシート）
Aグループの議論メモ・アイデア一覧の原本
Google スプレッドシートを開く

学生向けの参考 にいがた鮭プロジェクト
主催 新潟日報社・共催 新潟県。学生チームが運営
sakepro.jp

制度（土台） ふるさと住民登録制度（総務省）
関係人口の登録・特典の基盤。本提言の土台
soumu.go.jp/furusatojuumin/

会議体 仙台若者会議「せんだいユースカウンシル」
会議体の概要・開催状況（仙台市）
city.sendai.jp/.../sendaiyouthcouncil.html

データ出典 仙台市「東北大学と協調した地域創生」
仙台市まちづくり政策局（2025年1月）。原典p.2の図を使用
tfc.tohoku.ac.jp/.../slide_fujiwara.pdf

社会人向けの参考 群馬パスポート（群馬県）
GUNMA PASSPORT。県のパスポート型パンフレット
gunpass.pref.gunma.jp

学生向けの参考 広報いせさき（伊勢崎市）
伊勢崎市の広報紙（議論メモで挙がった他都市事例）
city.isesaki.lg.jp/.../koho_isesaki/

既存事業 仙台市協働まちづくり推進プラン2026
令和8年3月策定。まちづくり関係事業の一覧（施策評価の参照元）
city.sendai.jp/.../kyomachiplan2026.pdf